

土佐の『蠹簡集残篇』に、企救郡吉田村（小倉南区）の地頭武藤吉田孫次郎入道宗智の言上が出ている。それによると、兄の武藤新左衛門入道崇観が規矩高政に加担して、惣領職を闕所けつしよされたという。

企救一郡の国衙領や山鹿庄が北条得宗領であったことから考えて、その地頭代官を務めた長野氏や山鹿氏が、規矩高政をかくまい、下地の引き渡しを拒んで挙兵したものと考えられる。

なお、このころ闕所されている下毛郡大家郷司藤原久明（菅津又三郎『阿蘇文書』）、京都郡草美彦三郎入道、企救郡曾根弥四郎入道、田川郡白桑紀平四郎入道らも、規矩高政や糸田貞義に加担したのではあるまいか。

北条氏残党の挙兵は長門国でも起こり、豊前・肥前の武士が渡海して、建武二年正月、越後左近将監入道（金沢貞将の子カ）、上野四郎入道（長門探題北条時直の子カ）らを長門の国府佐加利（下山・盛山）城に攻めて生け捕りにした（『田口文書』・『武藤吉田文書』）。

二 足利尊氏の反逆

京都突入と九 建武二年（二三三五）七月の中先代の乱をきっかけとして、翌月鎌倉に下向した足利尊氏州への敗走 は八月十五日、新田義貞の罪悪を数え上げて叛意を明らかにした。

尊氏の弟直義は、十一月二日、新田義貞誅伐のために、味方に加わるよう諸方の武士へ呼びかけた。

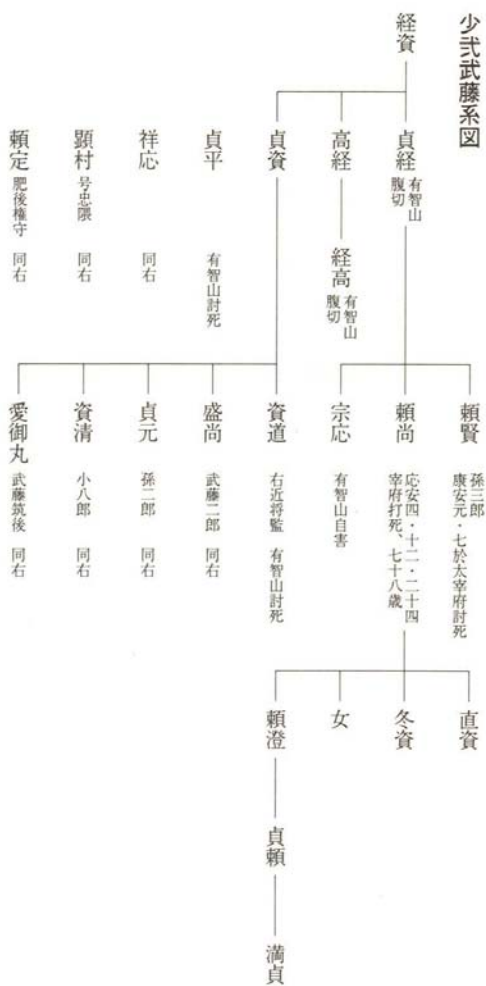
尊氏を討つため、鎌倉へ向かった新田義貞を大将とする官軍は、箱根と竹の下での合戦で、大友左近将監貞載らの寝返りによって大敗し、都へ逃げ帰った。尊氏はこれを追って、建武三年（二三三六）正月十日、

山崎の合戦で大友千代松丸(氏泰)・宇都宮治部大輔公綱らを降し、京都に突入した。しかし、奥州から上洛してきた北畠顕家軍に敗れて、二月十二日、兵庫津から、大友千代松丸の船に乗って九州へ敗走した。これより前の二月三日、宇都宮公綱は再び官軍に降り、尊氏再上洛後は出家したが、のち吉野へ走り、還俗して四位の左少将となった

多々良浜の戦いの勝利と上洛

尊氏が九州へ向かったという知らせを受けた菊池武重の弟武敏は大軍を率いて博多へ向かった。尊氏方としての態度を明らかにしていた少式入道妙恵は、これを高良山(久留米市)に阻止しようとしたが、水木の渡り(太宰府市)で敗軍し、太宰府有智山城へ撤退したが、味方の裏切

少式武藤系図



りに遭って陥落し、一族二百数十人とともに自害した。六十五歳であった。

そのころ、新少弐頼尚は三〇〇騎ほどを率いて尊氏を迎え、門司・芦屋・宗像とお供している。尊氏は三月二日多々良浜に、菊池・阿蘇氏らの官軍と対陣し、少数の軍勢をもって、官軍を破り、太宰府へ入った。菊池武敏は肥後へ退き、深手を負った阿蘇大宮司惟直は、肥前小杵山おつきやまで自害し、秋月備前守も、太宰府付近で、一族二〇余人とともに討たれた。

太宰府の足利尊氏は、三月八日ごろ、筑後黒木城に籠城ろうじょうした菊池武敏討伐に、一族の一色頼兼（上野左馬助）を派遣し、これを攻略させた。

菊池武敏は豊後玖珠城（切株山）へ逃れ、大友千代松丸の長兄二郎貞順さだゆきと十月十二日まで抵抗を続けた。尊氏は一色右馬助頼行を玖珠城へ派遣し、豊前・豊後・肥前などの武士に攻略を命じた。

下毛郡の野仲郷司の庶子野依道棟のよは、惣領とともに攻囲軍に加わり、合戦の確認者を多数あげているが、その中に田中三郎五郎入道がいる。九月十二日夜、城中へ攻撃をかけたとき、安心院五郎とともに現場にいた。当町田中と関係のある武士であろうか。

この間、態勢を整えた尊氏は、再上洛を決し、三月末日、上洛の途に就くことになった。

新田右衛門佐義貞の与党誅伐の事、院宣を下さるる所なり、よつて今月二十八日、上洛すべきなり、発向の時、軍忠を抽すべきの状、件の如し。

建武三年三月二十六日

尊氏（花押）

宇都宮（公世）因幡権守殿

（原文は漢文）

この史料によると、朝敵の汚名を逸らすため、持明院統の光厳上皇を抱き込み、その院宣を盾として、宇都宮公景（佐田氏の祖）ら、九州・中国・四国の武士に上洛を命じている。

尊氏は、博多に一色宮内少輔範氏（入道道猷）を残して鎮西を管領させ、四月三日、東上した。このとき『太平記』は、少弐・大友両氏もどめおいたと

あるが、『梅松論』は、大友・少弐・宇都宮氏は將軍に従い備後鞆の津から、少弐頼尚は陸路を足利直義に従って上洛したとある。『梅松論』の方が真実らしい。田口孫次郎重連は八月二十三日から二十五日まで、守護少弐頼尚のお供をして軍忠を励んだとして証判を得ており、ずっと在京していたと思われる（『田口文書』）。

鎮西管領一色氏 と九州の武士

再上洛を果たした尊氏の諮問に答えて、建武三年十一月七日、旧幕府の吏僚二階堂是円ら八人が建武式目一七か条を提出した。そのメンバーに頼尚がいる。「諸国の守護人は、殊に政務の器用を択ばるべき事」など、建武中興政府の混乱の反省の上立って、政治の正しい在り方を示した。この諮問を推進したのは足利直義であろうといわれている。少弐頼尚が足利直義と結び付いたのは、再上洛の途中に始まるらしい。

建武五年（一三三八）、少弐頼尚は、豊前国と亡父貞経の領国筑前・肥後の守護職を与えられて帰国した。しかし、博多には鎮西管領一色道猷がいて九州全域の武士を掌握しようと努力しており、とかく両者の職掌を侵すことが多く、次第に対立するようになった。



一色道猷の花押

暦応三年（一三四〇）二月、一色道猷は帰洛の許可を九か度も求めたが許されず、それならば、管領料所を下さり、管領分国を定めて、軍勢催促させてほしいと長文の嘆願書を送った。その中で、鎮西料所は、天雨田庄八〇町のほかは、ことごとく相違して僅少であるため、従人も二〇余人に減ってしまった。また、少式頼尚が帰国して、豊前・筑前・肥後は頼尚が軍勢催促することになり、暦応二年十二月、大友氏泰が帰国して、豊後と肥前の軍勢催促することになったので、残るは筑後国のみ軍勢催促できることになった。しかし、筑後国は大半が南朝方であるから、他国へ動員をかけることなど思いもよらないことである。大隅・薩摩は遠いうえ、畠山氏や島津氏が奉行していて催促しがたい状況にある。だから、早急に管領分国を設定していただきたいと述べている。

少式・大友氏の帰国で、鎮西管領の権限が、次々と制限され、弱まっていたのである。

この時期（建武三年四月二十九日）、得永地頭職が、長門国串崎大宮司へ寄進され、將軍↓頼尚↓弓削田六郎入道・白土新三郎の手順で打ち渡されている。得永は下毛郡や京都郡にもあるの
で、当町の徳永と特定することはできないが、今後の課題としておきたい。

また、『西郷文書』に次の史料が見える。

（花押）

豊前国分寺領内塔田村政所職の事

右、彼職においては領知せしめ、恒例の御年貢・御公事等、懈怠（怠り）なくその沙汰を致すべき者也、仍って、状件の如し



少式頼尚の花押

暦応三年十月廿五日

弓削田孫増御前所

この意味は、国分寺領である上毛郡塔田村（豊前市）の政所職を田川郡の弓削田氏へ預けるから、年貢・公事の寺納を怠らないようにせよというものである。数少ない豊前国分寺関係の史料である。

三 鎮西管領足利直冬と郷土

足利直冬 足利兵衛佐直冬は、足利尊氏の長子であるが、正室の子でないため、尊氏は彼を優遇することを避けてきた。尊氏の弟直義は、独身で、子がいなかったから、直冬を養子としてかばつ

ていたが、尊氏の執事高師直は、直冬を尊氏に近付けることを嫌い、両者は険悪な状態にあった。

貞和五年（一三四九）四月、直義は、直冬を中国探題として、中国八か国の支配に当たらせるために備後国鞆の津に下向させた。間もなく、高師直のクーデターによって、直義が失脚し、直義にゆだねられていた一般政務および訴訟裁決権を尊氏の嫡子義詮へ譲らされた。

また、高師直は中国探題足利直冬の討伐を命じた。

足利直冬は、伊予や備後の武士に守られて、四国へ渡ったと、京都で噂されたが、実は肥後の河尻幸俊の船で、肥後緑川の河尻に上陸し、大友一族詫磨宗直らに支えられて、大和太郎左衛門尉（宇都宮隆房カ）の城へ押し寄せた。『相良家文書』に次の記



直冬の花押